

## 組織目標評価報告書(2019年度)

部局名:

工学部

部局長名:

阿部 匡伸

目標・取組	目標・取組の実施状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	教育領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>「教育の質保証」に関するPDCAを組織的に実施するための体制の整備</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>例年通り外部評価委員会を開催し、新たに評価委員会の指摘項目の対応を見える化する。</li> <li>例年通りピアレビューを実施し、新たにレビューの効果を見える化する。</li> <li>例年通り授業評価アンケートを実施し、新たに授業評価アンケート結果の分析を行う。</li> <li>PBLやアクティブラーニングに関して、教育効果の評価法を実験的に実施する。外部機関による教育効果評価法の導入も検討する。</li> </ul> <p><b>大学院のリカレント教育の推進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>岡山県の寄付講座を軸に、セキュリティとAIに関するリカレント教育を試行する</li> </ul> <p><b>グローバル教育の推進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>工学部独自の海外短期研修(DIG)を継続的に実施。派遣数拡大を目指し、タイ王国、台湾に加えて、新たな開催国(韓国)での展開を模索する。</li> <li>工学部独自の海外短期留学(HUG)を継続的に実施。派遣数拡大を目指し、UBCへの派遣を模索する。</li> </ul> <p><b>学生の活性化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>昨年に引き続き、学部長裁量経費により学生活動支援を実施する。</li> </ul>	<p>関連する年度計画の番号</p> <p>15-1 5-1 16-1 52-1</p> <p><b>「教育の質保証」に関するPDCAを組織的に実施するための体制の整備</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>左記の項目は全て実施済み。質保証の議論は、新生工学部のカリキュラムを検討する中で議論した。ディプロマポリシーを再構築し、それに基づいたカリキュラムポリシーを策定することで、新生工学部として教育の質保証に関する意識合わせができたと考ええる。</li> </ul> <p><b>大学院のリカレント教育の推進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>岡山県の寄付講座の設置にともない、公開講座(トライアル)として参加者を募集した。岡山県内の技術者や高校の教員など定員(20名)を超える<b>27名の応募</b>があった。立ち上げとしてはまずまずである。なお、本年度は参加費を無料としている。</li> <li>公開講座のトライアルとして、IoT関連2テーマの<b>PBL演習を提供</b>した。評判は上々であった。</li> <li>在宅や在社での受講を実現するため、全19科目(IoT関連6科目、AI関連6科目、セキュリティ関連7科目)の一部の<b>VoD教材を開発</b>して上記応募者に公開した。ほぼ、全員がほぼ全てのコンテンツを閲覧しており、<b>VoDの有効性が明確</b>となった。</li> </ul> <p><b>グローバル教育の推進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度に引き続き、工学部独自の海外短期研修(DIG)と短期留学(HUG)は<b>JASSO</b>に採択。</li> <li>DIGは新たに韓国版を開発し、9月に<b>台湾(30名)と韓国(12名)</b>で開催した。3月のタイ(22名)は事前研修を実施したものの、<b>新型コロナウイルス</b>がパンデミック状態になりつつあったため中止した。結果的には早めの中止が功を奏して影響を最小限に食い止められた。</li> <li>HUGは3年2学期と夏休みを利用した短期留学であり、今年度が2年目。<b>5名</b>(昨年度は2名)がロードアイランド大学(米国)に3ヵ月留学した。内容は研究室での研究補助である。全員TOEICの点数は800点を超えて900点台もいるなど、<b>優秀な学生を送り込めたと</b>考えている。今後も強化して行きたいと考えている。</li> </ul> <p><b>学生の活性化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生の自主的な活動を支援し、積極的な学生を掘り起こすことを目的として、<b>新たに情報系</b>を加えて、以下の3件を支援した。着実に活性化が進んでいると考える。</li> <li>情報系学生有志が<b>セキュリティ関係のコンテスト</b>(MWS Cup)に初参加。コンテストには大学院生チームも含め15チームが参加した。成績は9位であり、善戦したと考える。</li> <li>つやま<b>ロボットコンテスト</b>にロボット研究会から5チームが参加。内4チームは1年生。3年生チームが4位に入賞。特別賞、技術賞を受賞。</li> <li>機械システム系学生有志が<b>学生フォーミュラ日本大会</b>2019に参加。初の3年連続全技完走を達成。3年連続で日本自動車工業会会長賞を受賞。</li> </ul>
②研究領域	研究領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>科研費</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学部、学科内での支援体制を充実させ、新規採択率向上を目指す。</li> </ul> <p><b>共同研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>間接経費の引き上げに伴って、共同研究獲得者に対してインセンティブを与える仕組みを導入する。</li> </ul> <p><b>受託研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>岡山大学の重点研究分野をベースに、大型予算への提案を支援する。</li> <li>工学部内の関連研究者の見える化を行い、新たな研究グループ形成を支援する。</li> </ul> <p><b>Q1ジャーナル、国際共著論文</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>若手研究員の海外短期派遣を支援し、共同研究への進展や継続的な研究交流の実現を目指す。</li> <li>海外からのポストドク、ポストドクの採用による研究の活性化の方法論を検討する。</li> </ul>	<p>関連する年度計画の番号</p> <p>38-1 39-1</p> <p><b>科研費</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自然科学研究科と協力して、学科毎でレビューする体制を構築した。R2年度応募総数71件、継続数53件、研究番号取得者数107名であることから、<b>116%</b>(=(53+71)/107)となり、総体として一人一件以上にトライしていることになる。</li> </ul> <p><b>共同研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>部局に配分される間接経費の一部を原資として、共同研究を締結した研究者に<b>インセンティブを配分</b>するルールを制定した。</li> </ul> <p><b>受託研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Society5.0への関与を教員が意識することと、工学部の研究領域の可視化を目的として、「<b>Society5.0教員マップ</b>」を作成して工学部全体で共有した。</li> </ul> <p><b>Q1ジャーナル、国際共著論文</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>テニユアトラックジュニア、SHINEプログラム</b>を積極的に利用し、若手教員や女性教員の後押しを実施した。</li> </ul>
③社会貢献(診療を含む)領域	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>地域社会との連携、社会貢献について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>SDGs貢献の位置づけで、創造工学センタが中心となり、小学生、中学生対象の出前実験や出前講義を行う。</li> <li>公開講座を継続実施する</li> </ul> <p><b>国際交流・協力について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミャンマーとの連携について、関連他大学(六大学)とともに推進</li> <li>中国赴日留学生教育の実施</li> <li>さくらサイエンスプログラムの継続提案</li> </ul>	<p>関連する年度計画の番号</p> <p>46-1</p> <p><b>地域社会との連携、社会貢献について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>創造工学センタが中心となり、「小学生のための工学実験教室(3テーマ)」「にちようび子ども大学」「わくわく体験教室」3回を開催し、好評を得た。</li> <li>公開講座、出前講義は、例年通り実施。</li> </ul> <p><b>国際交流・協力について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ミャンマーとの連携教員を選定し、現地での教育指導を行った。</li> <li>中国赴日留学生教育の取り纏めを担当。これに関連して国費留学生を12人を獲得。</li> <li>中国東北大学とのさくらサイエンスプログラムは新型コロナウイルスのため中止。</li> </ul>
④管理運営領域	管理運営領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等
<p><b>新組織立ち上げについて</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>部会を中心に新組織のカリキュラム、入試選抜法の検討を進める。</li> <li>女性研究者育成に関して、入試選抜法も含めて検討する。</li> <li>事務と協力して、エビデンスの収集等を行い、申請書を作成する。</li> </ul> <p><b>人事について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新人事選考方式に速やかに対応すべく規定等を整備する。</li> </ul> <p><b>第3期中期目標期間評価</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度の実施に向けて、教育活動及び研究活動の状況の分析の準備を進める。</li> </ul>	<p>関連する年度計画の番号</p> <p>2-3</p> <p><b>新組織立ち上げについて</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>工学部と環境理工学部の双方から委員を選出し「カリキュラム検討委員会」を設置し、新生「工学部」の3ポリシーの設定、カリキュラムの構成、入試方法などを議論し、文科省の指導を仰ぎつつ設置審に提出する資料作成を行った。<b>令和2年度4月申請の目途</b>を付けた。</li> <li>女性研究者育成は、女子学生が受験し易い入試科目構成とし、女子学生増を狙うとした。</li> </ul> <p><b>人事について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新しい人事制度に対応して、工学部の人事フローを整備。工学部人事委員会を衣替えして、工学部全体に渡る<b>議論と調整の機能を明確</b>にした。</li> <li>これに基づき令和元年度の人事を遂行した。</li> </ul> <p><b>第3期中期目標期間評価</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教育活動については、工学部長室が中心となり取り纏めた。また、研究活動については、自然科学研究科(工)と役割分担を明確にして取りまとめを進めた。</li> </ul>